

令和七年度 プレテスト 解答

一

問一 A エ B ウ C ア

問二 ウ

問三 ア 西洋的知識(五字) イ 民間企業(四字)

問四 芸術や科学研究に携わる仕事は自分のためにする「自己本位」の行為(三十一字)

問五 エ

問六 社会とのつながりを保つものがなくなる(十八字)

問七 ア

問八 ウ

問九 水平的なつながり

問十 イ

二

問一 A カ B ウ C ア D オ

問二 九月の末から十月のはじめ

問三 ア 集合場所 イ 最終地点

問四 ウ

問五 I エ II オ III ア IV イ V ウ

問六 はじめて渡りをしようとしているサシバの若鳥は、親鳥や大人のサ

シバに守られて渡りをする(四十二字)

問七 一羽で旅立つ

問八 カラスにおそわれて羽根を一本折られたから。(二十一字)

問九 泣く

問十 エ

三

(1) 首 (2) 耳 (3) 目 (4) 口 (5) 足

四

(1) ① エ ② イ ③ ア

(2) ① ウ ② イ ③ ア ④ オ ⑤ エ

五

(1) びんじょう (2) のうひん (3) ひひょう

(4) せいい (5) はくがく

(7) 夜行 (8) 訪問 (9) 配布

(10) 許可

一

問一 A 夏目漱石は下世話には関心がないと思われていたが、「道楽と職業」という講演を行った。逆接の意味を表す「しかし」が適切。

B それまでは明治時代の話だったのが、二十一世紀の話に移っている。転換の意味を表す「では」が適切。

C 前にある話題の実例が続けられている。説明の意味を表す「たとえば」が適切。

問二 「草枕」は一九〇六年に書かれた夏目漱石の三作目の作品である。

問三 大学を出た者は西洋的知識を手にしていたが、その受け皿となる民間企業が育っていなかったため、働く場所を見つけることが難しかった。

問四 夏目漱石は「仕事というのは他人のためになすもの、すなわち『他本位』の行為だ。一方で芸術や科学研究に携わる仕事は『自己本位』である」と考えていた。

問五 E 「仕事を選択し、将来を自分で切り開いていくという人生観は、まだ存在しなかったのです」と書かれている。

問六 本文に「仕事は個人と社会とのつながりを保つもの」であると説明されている。つまり、仕事を失ったシニアは、社会とのつながりを保つものがなくなるのである。

問七 「この問題はいささか難しい」、「はげしく怒られていささかたじろいだ」などの使い方をする。

問八 農業は、最先端で時代をリードするような職業ではない。また見返りが大きいものでもない。特に危険でもないので「堅実でやりがいのある」が適切。

問九 「ヨコのつながり」もほぼ同じ意味を表すが、指定文字が八字なので「水平的なつながり」が適切。

問十 A 図式的な二分法はあまり重要でないと書かれている。

ウ 若者は、終身雇用が過去のものになりつつあることや多くの大企業が規模を縮小することに悩んでいる。

E アイデア一つだけで起業したり、社会人になったのにいきなり留学したりする若者が必ず失敗するとは書かれていない。

二

問一 A 「バタツと」は、物事が急に絶える様子を表す。

B 「スーッと」は、なめらかに動作が進む様子を表す。

C サシバの姿を見失ったのでざわめきはおさまって、「しんと」静まりかえった。

D ジジさんに肩をたたかれたので、颯太は驚いた。驚く様子を表す「はっと」が適切。

問二 たくさんワシ・タカ類を見ることができるのは、タカ渡りが行われる九月末から十月のはじめだけである。

問三 タカが集まってくる地点のことをジジさんは「集合場所」と言った。そしてタカの行き先について「インドネシアだって聞いたことがある」と話している。インドネシアがタカの渡りの「最終地点」である。

問四 ウ 颯太は「タカの渡るルートはだいぶわかってきた」と話している。

問五 I 「北西、十一時方向、あれ、カラスか？」に続く文なので、「ん？ カラスに追われて、一羽、なんだろ？ お、サシバだ！」が適切。

II 直前にカラスの群れの中から抜け出したタカが自分たち

の方に向かってくることが書かれているので、「逃げてくる」が適切。

Ⅲ 直後に「残念そうな声があり、真子は双眼鏡をおろした」と書かれているので、「見失っちゃった」が適切。

Ⅳ 前後の文で、みんなが再びサシバの姿をとらえたことがわかるので、「さつき、カラスに追われていたサシバの若鳥だ」が適切。

Ⅴ 直前に「ピーックルー」というサシバの鳴き声が示されているので、「わ、サシバが鳴いた！」が適切。

問六 真子が「へえ。その若鳥って、親鳥や大人のサシバに守られて渡りをするんでしょう？」とたずねると颯太は「ないない」と否定した。

問七 「たった一羽で渡っていく」は「一羽で旅立つ」ということである。

問八 颯太が「あいつ、羽根が折れてる。手負いだな。さつきのカラスにやられたんだ」と話している。

問九 カラスに追われ、羽根を折られたサシバの若鳥の気持ちを考える。「泣く」が適切。

問十 「けなげ」は年少者や力の弱い人が困難に立ち向かう様子を表すことばである。真子は奮戦するサシバの若鳥の姿を見て、感動していた。

三

(1) 「首を長くする」…まちこがれる。

(2) 「耳が早い」…人よりも早く聞きつける。

(3) 「目の中に入れても痛くない」…たいへんかわいく思う。

(4) 「口が重い」…ことば数が少ない。

四

(5) 「足もとを見る」…人の弱みにつけこむ。

(1) ① 「両親からほめられる」の「られる」は受け身の助動詞である。

エが同じで、アは尊敬、イは可能、ウは自発の助動詞である。

② 「ありがたくださいます」の「いただき」は謙譲語である。

イが同じで、アとエは尊敬語、ウはていねい語である。

③ 「上手な」は形容動詞である。アが同じで、他はすべて形容詞である。

(2) ① 「父母」・ウ「異同」…反対の意味の字を重ねたもの。

② 「生活」・イ「海洋」…同じような意味の字を重ねたもの。

③ 「新年」・ア「曲線」…上の字が下の字を修飾しているもの。

④ 「読書」・オ「加熱」…下の字が上の字の目的語となっているもの。

⑤ 「頭痛」・エ「民営」…上の字が主語、下の字が述語になっているもの。

五

便乗…よい機会をうまく利用すること。

納品…品物を納入すること。

批評…自分の評価を述べること。

誠意…良心のままに物事にあたる気持ち。

博学…多くのことを知っている状態。

担任…仕事を受けもつこと。担当。

夜行…夜に活動すること。

訪問…人を訪ねること。

配布…多数の人に物を配ること。

許可…ある行為や行動を許すこと。